

受け継がれる伝統 ばんえいの競走用具

ばんえい競馬は、使用される用具が多いのも特徴のひとつ。中でも伝統の技が生み出した美しい馬具は、レースに彩りを添えています。

三種類からなる競走用具

ばんえい競馬の競走用具は、開拓時代から農耕馬や荷役馬に使用されてきた馬具がもとになっています。普通の競馬に比べて用具の種類が多く、大きく分けると、馬を操作するための「馭具」、そりをひくための「ひき具」、馬にひかせる「そりと重量物」の三種類があります。

このうち馭具やひき具は、彩色や鉾打ちが施され、伝統工芸品としても注目すべきもの。かつては老練の馬具職人たちによって、それぞれの馬の肌にとりあうよう作られてきましたが、近年はこの馬具製造技術が途絶え、手持ちの馬具が大切に受け継がれています。

馬を操る「馭具」

馬を操る馭具はばんえいに限らず、普通の競馬や乗馬にも共通す

をひく馬に、なるべく負担をかけずに最大限の力を発揮させるため、さまざまな工夫がなされています。

ばん馬は肩でそりをひくため、肩が一番、加重が掛かります。この部分に装着するのが二本の鋼鉄でできた「わらび型」と、わらび型が直に皮膚に当たらないよう保護するための「がら」。そりと馬を連結するのは「胴引き」です。わらび型と胴引を結ぶ革製の「よび出し」「背づり」「つり革」は、主に加重を緩衝する役割を担っています。また、そりに付属する「引木」、通称「どっこい」は、馬が左右に動いてもそりが真つすぐ進むよう調整しています。

馬とそりを結ぶものには、胴引きのほかに「かじ棒」と呼ばれる



わらび型とがら、背づりなど。



頭絡とハミ。

るものです。馬の口にくわえさせるハミ、ハミを保持するための頭絡、ハミと結ばれて騎手の手に握られる手綱があります。ばんえいの騎手が用いる手綱は「馭者手綱」と呼ばれ、長さ七・五メートル。騎手はハミに接続したこの手綱だけを使って、前進、停止、走れ、などの指示を馬に伝えます。

そりをひくための「ひき具」

馬にそりをひかせるための「ひき具」は種類が多く、複雑に結びついています。何百キロもの重量

グラスファイバー製の棒があります。これは文字通り、その方向を決めるかじの役目を果たすとともに、馬が後退するのを制限する役も担います。この歯止め役は、ことに障害を越える際に重要です。

そりと重量物

ばんえい用のそりは、鋼鉄製で重さ四五〇キロ。その上には「箱型重量物」と呼ばれる鉄箱が四つ固定されていて、この中に規定の重量物を収納します。重量物は鉄製の板状で、中央に穴があり、ここに箱の中に立つボルトを差し込んで固定します。重量物は、五、十、三十、五十キロの四種類。これらを組み合わせて重量を調整します。

ばんえい競馬では、馬の年齢や成績などによってひく重さが決まっています。これを「ばんえい重量」といいます。その重さは一律四五〇キロで、ばんえい重量六〇〇キロの馬なら、一五〇キロ分の重量物を積んだそりをひくこととなります。また、その後端は三角形に張り出しており、その尖端がゴールを決する最後端です。



5kg、10kg、30kg、50kgと、4種類の板状の重量物を組み合わせる。



騎手重量を調整するためのウェイト。



ウェイトを収納する「重量かばん」。アルミの弁当箱に似ているため愛称で「弁当箱」と呼ばれている。騎手は各自の弁当箱をもって検量を受ける。

そりの上にある4つの箱型重量物のうち、1番前と後部2つの箱に重量物を分散して収納。前から2番目の箱には、騎手重量を調整するための重量かばん、通称「弁当箱」を収納する。